

熊倉 賢二 著

図譜による胃X線診断学

大阪回生病院放射線科 青 山 大 三

熊倉賢二博士の胃X線診断の本が出版されることは、ずいぶん前に耳に入った。これをきいて、大変喜んだ。それが実現したことはほんとにうれしい。

先生の透視が始まる前に、どんな準備がなされているか、（つまり患者側について、バリウムについて）が詳細にかいてない。しかし、これは大切なことである。透視が始まってからは多くの人が見学して知っているわけである。先生の行動はみていけばわかるが、心の中はわからない。また、X線像の御説明を願った人ならば、誰もが知っているように、先生の心の中にあるものと表現とが100%一致していないのは、誰でもがそうであるように、頭の中にあるものが、ほんとうにうまく口で表わせないためであろう。そのほうが真実である。また先生のおとりになったあの美しい写真をみられるときでも、いつでも不満で、もっとあそこをこのように、ここはあのようにと、理想像をえがいていられるようである。つまりこれでよいということがない。またあるときは、2~3枚または15枚位のフィルムに描出された像を頭の中に整理して説明されることもあろう。そうでないと説明ができないこともあるようである。同一病変の説明には多くのフィルムを要することはしばしばである。

X線像をうるにいたるまでの考え方が、実に flexible である。多岐にわたっていることは病巣の数、拡がり、深さ、性質、凹凸の程度、硬さ、柔さなどが未知であるので、どのような撮影技術が、その病巣にマッチしているかは、なかなか

わかりにくい。もし摘出した胃が再び体内に入られて、もとの状態のように活動しうらなれば、X線撮影技術はずっと楽になるであろう。このようなことも考えていられるのではなかろうかと思う。

先生の撮影技術も年々変化してゆき、あの本では過去から1968年までがそうであったというわけで、今後はどう変化するかが大変楽しみにされるわけである。

このような撮影技術ならば、こういった病変は描写されるであろうが、別の異なった病変は同じ方法では描写されてこない。つまり利点ばかりを考えないで、欠点をも同時に考えてゆく、その考え方が先生の特徴である。

胃X線診断をあれだけの真にまとめられたことは、むしろ短くするのに骨をおられたことと思うし、写真の枚数もあれだけに少なくされたことに苦慮されたことと思う。写真の説明をよんでいるとその気持ちがよくわかる。

この本に述べられていることは、初心者が読むとただちに自信喪失して、頭がくらくらとしてくるのではなかろうか。ある程度X線診断をやった人が読むとよいのではなかろうか。むやみに理論に走っている人は一々その鉦先をおられてしまいそうである。理論よりも、その病巣にほんとうに適切なX線撮影法は何であろうかという、一匹の魚をとるのに大きな網をはって、その網をだんだんと小さくしてゆくような感じがする。現にそうあってこそ真実の姿であると思う。

とくに多発性病変の考え方が所々に出てくるが、この点は一般読者に特に注意

して頂きたいところである。

ひるがえって考えるに、熱意の一語にあるとなされているが、何に対する熱意かを今さら教えて頂きたいような気がするが、X線の技術に対する熱意というふうに、一般に解釈されているであろう。それは勿論であるが、ヒューマニズムに対する熱意こそ、その根元であると思う。また、先生御自身の健康に対する熱意も含まれていることは当然である。先生が健康でいられる間は先生に診断をして頂けるという安心感こそ、何といってもその有難味を表現してよいかわからない。実に信頼するに足るということこそ、人々にとって幸をもたらすものではないのではないかと思う。

胃のX線診断を志す人は必ず座右の銘、またはバイブルとして、本書を是非本棚においてほしいと思う。

本書の中のX線像はなかなかとれるものではなく、先生のような高度の熟練者が百枚撮影されてそのうち2~3枚が本書中にあるわけで、先生の技術よりまさるものは、まず不可能であると思われるものすらある。従って本書は今後10年や20年はみあきないであろう。

どうか、X線像や文章にのみとらわれず、先生の心を本書を通じて、読みとってほしいと思う。できれば、先生の透視、読影の両方の場に自分で立会われてこそ、その真髄がわかってくると思う。

物を買うのに、デパートで買うとんでもある反面、特殊な高級品はないが、専門店では特殊な高級品がいくつでもある。そのような意味で胃X線診断の専門店である。幅の広い考え方、技術をもとにその最も適切な方法でその病巣をみから後に真の診断ができるのではなかろうか。この意味で世界中での最良書である。

A4 頁 512 図 873

金原出版発行 ¥ 13,500